

《論文》

スラブ・ロシアの日常世界における邪視

岩本真樹

1. はじめに

ロシア人はとても迷信深い。巷では様々な俗信やジンクスがささやかれ、多くの人が縁起かつぎに気を配っている。これら多くの迷信・俗信は、10世紀のキリスト教の受容以前の異教時代のものである。そしてこの古代の迷信に対する信仰は千年以上前にロシアにもたらされた伝統的な正教も、70年以上続いたソビエト連邦の共産主義イデオロギーも一掃することはできなかった。

ロシアでは、他の多くの民族と同じように、「邪視」の俗信が広く信じられている。「邪視」は「凶眼」「邪眼」などとも呼ばれ、英語では Evil Eye といい、一般に人や物に悪い影響を及ぼす眼差しのことである。その影響により健康な子供は衰弱し、あるいは病気にかかり、品物は変質したり腐敗したりするといわれる。邪視への恐れは、俗信の形で生き残っている最も古い人間の恐怖の一つであろう。

邪視は非常に安定した概念であり、19世紀から20世紀には村や都市で同じように強く固定されている。ほとんどの場合、邪視は魔術の文脈で説明される。この広範囲に広がる迷信の説明のために医学的（狭義では眼科的）、社会学的、心理学的、人類学的な理論が用いられ、民俗学においては意味論的または民族言語学的アプローチがなされている（Петров [2014]: 319）。

この遠い昔の「悪い眼」の有害な作用やそれを避けるためのお守りの守護の力に対する信仰はスラブ人だけに固有のものではない。邪視という現象は世界各地でみられ、とくに地中海地域、中近東、南アジアに多く見られ、ヨーロッパや中国、北アフリカ、東アフリカ、アメリカなど広い範囲で認め

られていることがわかっている。しかしその概念は多様であり一般化することは困難である。

日本で初めて邪視についての論考を発表したのは南方熊楠である。「邪視」ということばも南方による訳語である。古くからの日常の伝承の中にある「邪悪な力」による災いを「悪い眼」と関係付けて考えた。各国での邪視の特徴の例示の中に日本における伝承や習慣との類似を指摘している。例えば、インドでは子どもへの視害を予防するために、父母が「マラ（死人）」「サラ（腐物）」などの悪称で呼んだというが、日本でも古く倉臣小屎くらのおみくそ、芦原醜男あしはらのしこおなどの名前があることはこれに相当するのではないかと述べている（南方 [1989] : 99）。つまり汚い名前の者には邪視も嫌がって近づかず、被害が及ばないのではないかと考えたのである。

邪視の現象はそれ自体が独特の不思議さを持っているのだが、また魔よけというこれを防ぐための具体的な技術や物が多く存在して、民衆の心に浸透し、生活の中にすっかり溶け込んでいるところが興味深い。人々の間でも邪視がどのように起こるのかはわかっていない。現在でもインターネットの検索システムを開けば、「邪視を祓う」や「邪視よけのお守りはいかが」などのタイトルのついたおびただしい数の邪視についてのサイトやフォーラムがあり、邪視の症状や、これを避ける方法について真剣に語り合い、大量の情報が流されている。「邪視についてのイメージは、ジェド・マロースや5月9日のパレード、オリヴィエサラダのようにぴったりとロシアの日常世界に貼り付いている」（Веселова, Мариничева [2012] : 53）。

南方による古今東西の邪視の例示を分析し、田中は「これへの対抗手段が多様で具体的であることがわかる。」（田中 [2017] : 163）と述べている。邪視は人の心と社会に深く結びついている現象であるために、それに対抗する手段、つまり魔よけも生活に密着し、日常のあらゆる場面で心の不安を取り除く役割を果たしていることがうかがえる。本稿では、スラブ・ロシアにおける伝統的な邪視の概念と、それを防止する魔よけの働きについて、その種類や仕組みを概観する。そして現代ロシアにおいて邪視の現象とそのとらえ方がどのように日常世界に組み込まれているのかということ、子どもへの

邪視、特に乳幼児に関わるものを紹介しつつ、その一端を明らかにすることを試みる。

昔から存在してきた俗信は人々の生活の知恵であり技術である。一種の制度のように、そこに暮らす人々の考えや行動を決定していく。こうした目に見えない生きたルールは異文化間のコミュニケーションにおいて、相互の理解に影響を及ぼすことが多い。邪視の概念を知ることもその一つであり、ロシア人の日常の意識に一步近づくことができるのではないだろうか。

2. スラブ・ロシアにおける邪視

2-1. 邪視の意味と定義。

ロシア語で「邪視」は *сглаз* といい、また *дурной глаз* (悪い眼) とも呼ばれる。

ロシア語辞典を見ると、ある辞書では「悪い眼により、誰かに害をもたらすこと、人または物を傷つけること。また寓意的意味で、あらかじめ成功や好首尾を予言すると、それがだめになってしまうこと」とある (Ушаков [1940] : 114)。他の辞書では同様に、「悪い眼で誰かに被害を与えること (不成功や不幸をもたらす眼差し)、あるいは「何か良いことをほめたり予言することにより、悪いことを呼び招くこと」と記されている (Шведов [2007] : 866)。

つまり *сглаз* には二つの意味がある。「眼差し」による邪視と、「ことば」による邪視である。

この二つ目の、「ことば」の意味があることは語源にも示されている。「ほめことばによる災いと視線による病気」という両方の意味を同時に持つ語は、全てのスラブ語で見出すことができ、これらは *рек-* / *реч-* / *рок-* (話す) を語根した派生語である：ウクライナ語で *уроки*, *урочища* ベラルーシ語で *уроки*, *суроцы* セルビア語で *урок*, *урук* ブルガリア語で *уроки*, *уроци* マケドニア語で *урок*, *зарек* スロベニア語で *uroki*, *urak* チェコ語で *urok* である。ロシア語にも *урок*, *уроки* という語があった。

さらに、ことばによる邪視があることは、「新ロシア語類義語辞典」において、сглазの動詞 сглазить の類語として **напророчить** (何か悪いことを予言する)、**накаркать** (縁起の悪い話をして不幸をもたらす)、**накликать** (災いを話題にしたために自分の身にそれを呼び招く) という語を挙げていることからわかる。その意味は「可能性のある好ましくない出来事を予言すること、言及することによりそれを現実のものとする。」である。сглазить と上記の一連の動詞は、同じ何かの不注意な発話に関係しており、しかもそれらは単なる言語行為を意味しているだけでなく、その発せられたことば自体により引き起こされた、現実における何らかの望ましくない変化を意味している。сглазить とそれ以外の一連の動詞との違いは、動詞グループが何かを「実現する」のに対し、сглазить は「喪失してしまう」ことである。さらに сглазить では、不注意なことばの結果、「必ず何か悪いことを得て、良いことを失うのである。」(**Новый объяснительный словарь синонимов русского языка**[1392]: 613)

予言とともに、相手をほめることによりかえって害を及ぼすという意味にも注意したい。ほめることと、その後の病気などの被害には客観的なつながりは不可能であるはずであるが、これは他の多くの国で認められる現象である。たとえばアラビア語圏においても「言語表現においてもっとも「邪視」の領域に触れるのは、他人または他人の物を褒める行為である」(スライマーン [2018-2019]: 37)とされている。また、このほめことばは羨む気持ちや嫉妬の感情と結びつけて考えられる場合が多い。たとえばフォスターは邪視の概念を視線と嫉妬に密接に関係する現象として説明している(Foster [1972])。伊東はこの現象を分析し「相手をほめたり、あらかじめ成功を予言したりすると、それが自らの潜在的な妬みの表現となり、自分自身の邪視の原因となったり、あるいは悪魔や悪霊の妬みを買ひ、その邪視によってかえって相手に災いをもたらす、という考えに基づいている。」(伊東 [1991]: 55)と述べている。また、ヴェセロワとマリニチェワは、ほめることと嫉妬・悪意は表裏一体であることを指摘し、「呪いによる病や邪視が暗躍するような、嫉妬とひそかな悪意に満ちたこの世界において、ほめことば

は重要な位置を占めている。単純でポジティブな行動が害を及ぼす力を持つ。(Веселова, Мариничева[2012]:53)」と述べている。

このように、сглаз とは、「主にほめることばの中にひそむ潜在的な妬みにより、かえって相手に災いが引き起こされること、あるいは見つめる人の眼差しが持つ不可思議な力によりあらゆる良いことを壊してしまうこと」となるであろう。

2-2. 邪視の特徴

邪視の現象は、あらゆる伝統的な文化の中に描かれてきた。その一般的な特徴はどのようなものであるだろうか。民俗言語学辞典(Левкиевская [2012]:592-602)を中心に確認しよう。

2-2-1. 邪視により災いを与える人の特徴

ほとんどの場合、邪視は理由のない偶発的な能力として特徴付けられる。その能力は自分の意思とは関係なく得られるものである。つまり、「たまたまそういう目を持っている」のである。そのため、ほとんどの場合、邪視の被害を与える力を持つ人自体に罪はないとされる。非常に親切な人が邪視を持つこともある。邪視が意図しないものであるという特質は、邪視を持つ人が自分の視線で害を及ぼすことへの恐れによって示される。例えば、何か一連の行為を実行するときに目を閉じようとする意志に現れる。トランプのカードを切って配る場合には自分の眼を指で閉じるのである。(Левкиевская [2008]:599)

しかし、伝統的には人の視線が脅威をもたらす可能性のある原因を特定する必要があった。第一には行動の主体、つまりその人自体に理由があるとさ

1 сглазと同様の文脈、同じ状況で用いられる語にпорча(呪いによる患い)がある。つまり、病気の形でもたらされる損害を表すことばである。ベトロフはこの両者の関係に言及し「20世紀から21世紀のテキストに見られるсглазとпорчаの違いは「病気の重さの程度」である。сглазはどちらかといえば不快な状態あるいは軽い病気を描写している。(Петров, 2014)」と述べており、筆者もこれに賛同し、両者に実質的な大きな違いはないと考える。本稿の資料においても、порчаと記載されているものも一部含んでいる。

れた。聖大土曜日や聖大金曜日などある特定の日に生まれた人々は悪の眼差しを持つと考えられた。「離乳の繰り返し」、つまり一度離乳したがしばらくして再びお乳に戻った人も挙げられる。これらの人々は成長して魔術師になるという迷信もある。ラデンコヴヴィチは、母乳は乳児（まだ自然界との決別が出来ていない）と母親（社会の一員）との間を仲介する霊的な力を持つものと考えられ「赤ん坊の乳房への復帰は、社会（生きる者の世界）から離れることを意味している」と説明している。（Раденкович Л. [2015] : 33）赤ん坊は出産により「あの世」から「この世」に送られるという民間信仰があるが、再び生まれる前の「あの世」へ戻ることににより特別な力を持つということである。また身体的な特徴がある人が邪視を持つとされた。身体に傾きがある人、たとえば身体の一部が不完全、左右が非対称の体型などの場合である。歯が生えて生まれた赤ん坊もそうである。視覚器官自体が害を与える特徴をもつ場合もある。斜視の人、独特の眼の色の人（緑や青、黒など自分が属する民族にいない眼の色、ギラギラする眼）、落ちくぼんだ眼の人、白目に赤い静脈が交差している人など標準とは異なる眼の特徴を持つ人が挙げられる。または月経中の女性や花嫁、葬儀への参加者など一定の状態にある人にもその力があるとされた。乞食や老婆、未亡人などの場合もある。専門の知識を持った呪術師、魔法使いの場合もあれば、民族的・社会的なよそ者の場合もあった（ジプシーや司祭）。朝起きて顔を洗わなかった人という場合もある。古代文化では、何らかの形で「あの世」の敵対的な世界の存在に似ていたり、社会的な常識を超えた行動をすることにより、悪の力が人間の世界に侵入すると考えられていたのである。

2-2-2. 災いを受けやすい人の特徴

次に、邪視の被害を受ける対象について確認しよう。守られるべきものは、人間自身とその人にとって価値のあるもの全てであるが、最も邪視による災いを受けやすい人間は「通過儀礼」という人生の重要な節目を迎える人間であるとされている。この時期の代表的なものとして、出産、結婚、死がある。そのとき、人はいわば二つの世界の境界にあり、そのために最も無防

備な状態にある。すべての新しいもの、特に初期段階のもの、すべての良いものが邪視の影響を受ける恐れがある。深刻な病や死の危険、不妊などの危険にさらされる。一方で、自分が境界状態にあることにより、逆に、自身が他人の危険の根源ともなる。

「出産」は、「他界」から「人間世界」への移行である。赤ん坊自身への危険があり、また妊婦への危険もある。特に洗礼前の新生児や、まだ歯が生え始めていない乳児、妊婦、産婦が危険とされる。

「結婚」は人の人生における二つ目の移行段階であり、新婚夫婦が邪視の対象となり、病気や死の危険にさらされる。結婚式で最も危険な瞬間は、教会への行き帰りの道中であるとされる。邪視を放つ嫉妬深い人や、魔女や吸血鬼などの危険もある。

「葬式」は、人間を「他界」へ送ることであり、あらゆる二重の危険をはらんでいる。まず、生きている人への危険がある。故人が自分の親戚や家族全員を自分と一緒に墓に引きずり込む可能性である。もう一つは故人自身が正しくない方法で埋葬される危険がある。その場合は、死んだ後に吸血鬼やさまよう死者となり、次の世界での平安を奪われる可能性がある。

人間と生活を共にし、支えとなる家畜やペットの鳥なども邪視の対象となる。特に生まれたばかりの動物や鳥のひなは、人間の子どもの同様に邪視の影響を受けやすいとされる。お産したばかりの家畜や、開花した後の植物、巣別れする際の蜜蜂なども危険がある。

人間が生活を安定させるために行う重要な仕事（布を織る、パン生地作り、耕作、種蒔き、収穫、家畜を野原へ追うこと、狩り、漁など）は、特に開始時において邪視の対象となる。このタイミングは、出産のように新しい世界へ生み出されることと同列とみなされるのである。（Левкиевская [2002] : 18-19）

2-2-3. 災いを受けやすい時間と場所の特徴

邪視の危険に影響を与える条件に時間と場所がある。たとえば、「悪い時間」に発したことばや投げた視線が危険なものとなるのである。危険な時間

とは、その日の「分かれ目」の時間、すなわち日没、日没後、真夜中である。危険が増す場所は、人が多く集まる場所である。屋外や市場、結婚式、夕べの集い、旅の道中などが挙げられる。さらによその人が家にやってきた場合も危険だとされる。人間が開拓し、所有する空間も邪視の危険を持つ。これは家や庭、畑などで、建て始めたばかりの家は特に危ないとされる。(Левкиевская [2008] : 599)

ここまで邪視の特徴について見てきたが、伝統的な考え方では、邪視が引き起こされるための条件には「境界状態 (リミナリティ)」、が大きく関係すると考えられているというひとつの特徴が挙げられるだろう。移行段階にいる人というのは、その文化における社会的立場が変化する状態にあり、境目はその二つの世界の間である。この境界状態は二つの世界のどちらにも属さない不安定で不確かな状態を生む。この時期は多くの文化において、迷信が生まれ、呪術的儀礼が存在しているが、邪視という「魔」の場合も、それを受けやすく、また逆に自身が害を及ぼす状態と考えられた。代表的な出産、結婚、死という時期のほかにも、何か重要な仕事を開始する時期も「生み出す」ときと同列に考えられ邪視の危険があるとされている。そのほかにも今日と昨日の分かれ目の時間、通常の枠の外にある形状や色などもクローズアップされている。

2-2-4. 邪視による損害

邪視を受けた場合、その影響は様々な形で現れる。一番多いのは、人や家畜の突然の発病である。重症の場合には死に至る。邪視を受けた人は顔色が悪くなり、痩せ、やつれる。頭痛や、めまい、意識障害、身体のだるさや筋肉痛、吐き気を訴える。手足の骨折や、内臓を患うこともあるとされる。

子供の場合は元気がなくなり、不安がり、頻繁に泣き、夜眠らなくなる。新婚夫婦の場合は不妊となる。家畜は乳が出なくなり、子が死ぬ。蜜蜂は死に、植物はしおれ、枯れる。

仕事は不首尾に終わる。例えば、布は織る間に糸が切れ、通常より大量の

糸が消費される。邪視を受けた鉢でこねたパンはふくらまず、狩りや漁は不漁に終わる。さらに人と結びつく様々な家庭用具（織機、こね棒、漁具、鉄砲など）にまで邪視の恐怖は及ぶ。（Левкиевская [2008] : 599）

2-2-5. 治療

邪視により生じた病気の治療方法についても触れておこう。この治療方法は現代まではほぼ変わらず続いていると言われている（Петров [2014]）。民間療法においては様々な治療方法があるが、多くの場合、邪視による病を治すためには呪術師のところへ駆けこんだ。

治療に取り掛かる前にその病気が本当に邪視によるものなのか、誰がその原因なのかを明らかにする必要がある。様々な方法があるが、例えば《炭を消す》やり方がある。水の入った容器に焼けた炭を3回、あるいは7回、または9回投げる。もし炭が水に接触してシューシュー音をたてるか（ロシア）、投げた炭の一つが水に沈めば（ブルガリア、セルビア、ウクライナなど）その人は邪視の被害に遭ったとされる。または、病人の洋服から糸を取って輪を作り、それを水の入ったボウルに放す。もし糸が水面で回転すれば病人には強い邪視の被害がある。

病人が治るかどうかを確認する方法もある。原因を探るときと同様に《炭を消す》方法を用いて、炭が水中に沈めばその人は死ぬ。もし水面に浮上すれば治る。卵を使う場合では、水に入った容器に卵を割り入れ、それを病人の頭の上に置く。もし卵核が水面にあれば病人は治る。もし水中に浮かんでいたら長く病む。もし底に沈めば死ぬ。

治療のために最も多く用いられるのが「浄化」という呪術的方法である。病人の洗浄や、燻蒸の方法がある。前掛けや袖、男性のズボン下で病人を拭いたり、あらかじめ3回床に落としておいた女性用ブラウスの裾の裏側で拭くなどがある。そのほか、清めた草、あるいは邪視の原因となった人の髪や衣服の切れ端を燃やし、その煙で病気の人や動物をいぶすことも行われる。

東スラブや南スラブでは治療または邪視の確定のために、しばしば水が使われる。これには「手を付けていない水」が用いられる。これは、無言で井

戸からくんできた水、あるいは早朝、まだ誰も使っていない川から組んできた水などをさす。または3つの源泉からくんできた水を使うという場合もある。

こうした邪視の治療を目的とした水で、さまざまな魔術的行為が行われた。水を部屋の神聖な角に置き、十字を切り、お祈りや呪文をとなえる。ドアノッカーの丸い取手に3度水を通し、容器に入れる。お皿の水を3度スプーンですくい、また元に戻す。藁屋根に水をまき、屋根から流れ落ちたしずくを容器に集め、そこに塩、灰、炭、薬草、鳥の羽根などを入れるなどの例がある。

病気をした人、中でも子どもの「再生」という方法もある。母親が子どもを家の玄関に敷居に寝かせ、3回またぎ、呪文をとなえるというものである。(Левкиевская [2008] : 599-600)

2-3. 魔よけについて

次に、邪視に対抗する防御の手段としての魔よけについて確認していこう。

2-3-1. 魔よけの定義について

魔よけは、厄災をもたらす邪悪な存在の侵入を防ぎ、退散させるための呪術的な行為やまじない物などをいう。ロシア語ではこれを **обереги** または **апотропей** という。その訳語としては「お守り」「護符」「魔よけ」などが挙げられるだろう。ここでは、邪悪なものを近づけない目的を強調するものとして、「魔よけ」という訳語を採用していくことにする。

魔よけの実態は複雑で実に多様であるが、ロシアでの邪視に対抗する伝統的な魔よけの内容は現代でもほとんど変わっていないとされる。(Петров [2014] : 329) スラブ・ロシアにおける邪視に対する魔よけを検討するにあたり、レフキエフスカヤの定義と分類をとりあげて整理してみよう。

魔よけの作用は、常に未来の危険な出来事に対して向けられており、その主要な目的は危険の防止である。どんな魔よけも、広い意味で人間とその世

界を様々な邪悪なものや危険から守ることが目的である。このことは、次のようなことばで言い表される：「何も悪いことがおこりませんように」「どんな悪いことも私達に及びませんように。」言い換えれば「全てうまくいきまじょうように」ということである（Левкиевская [2002]：16）。

つまり、魔よけの置かれる状況には、危険の潜在性がある。魔よけの重要な特徴は、常に危険な出来事に先行し、すでに起こった危険には関係がなく、危険の可能性だけに関わるということである。

レフキエフスカヤは魔よけの形式を、「物による魔よけ」、「呪文などのことばによる魔よけ」、「行動による魔よけ」の三つであると示した。この内、ここでは物による魔よけと行動による魔よけについて検討する。

2-3-2. 魔よけの戦略

では、Обереги（魔よけ）はどのようにしてその目的を達成するのだろうか。

「危険から対象を守る」状況は二つある。一つは、直接「対象を守る」状況である。もう一つは、間接的なもので、「危険を除く」状況である。つまり、魔よけの作用のベクトルが、守られる側に向けられているのか、あるいは危険の源に向いているのかによって異なるのである。

さらに、魔よけの戦略は三つの主要なカテゴリーに分類される。

- 1) 潜在的な厄災を人間に近づけないようにする。
- 2) 危険の持ち主に作用し、様々な方法でそれを無害化する。
- 3) 守られるもの自体に危険に負けない特質を与え、魔よけに変身させる。

目的を達するためのメカニズムや方法は多岐にわたり、これは10のモデルに分けることができる。

1) のモデルは、「包囲 *окурежение*」「遮断 *преграда*」「境界 *разграничение*」「覆う *укрывание*」の4つの方法があり、危険と、守られる対象とを区切る儀礼的な境界を作るものである。

2) のモデルは、危険をはらむ存在そのものに作用するもので、「無害化

нейтрализация]、「攻撃 нанесение удара」「撲滅 уничтожение」「撃退 отгон」の4種類がある。また「代理 замещение」は1)と2)の両方のカテゴリーに属する。

3)の場合は 魔よけの特質を守られる対象に移す「魔よけ化 апотропеизация」がある。

これら3つの戦略は、常に限定した働きというわけではなく、時に重なり合ったり、入れ替わったり、補完しあったりしながら機能を果たしていると考えerべきであろう。

では、次のこれらの分類の中から、邪視に関わる魔よけについて、その働きを「物によるもの」と「行動によるもの」の面から確認していこう。

「囲む окуржение」

最も頻繁に行われる普遍的なモチーフである。危険の主と守るべき対象との間に境界を作り、接触ができないようにして対象を守る。その境界となる形は円をなすことが多い。

この「囲む」戦略としての意味を持つ物に「帯 пояс」がある。帯は、神聖な意味を持ち、ロシアでは伝統的にもっとも強力な防御手段の一つとされている。

帯は、「自分」と「他人」の空間の境界として機能する。

帯は独立した魔よけとして、部屋に吊るしたり、何かに結びついたりした。ポーリャでは男性のズボンの帯は牛の角に結びつけることで牛を邪視から守った。

赤い色の帯は命と豊穡を強調しており、例えば、妊娠中の女性は赤い帯を締めて自身を邪悪な物から守った。葬式に参列する場合もお腹に赤い帯を締めることで赤ん坊を死の影響から守った。

魚の網が帯の役割をすることもあった。結婚式の二人は魚の網を直接肌の上に巻いて、邪視の危険から守った。

行動の意味でも、人や物に帯を締める行為は東方スラブにおいて広まっていた。ロシアでは洗礼の日に赤ん坊に帯を締めた、呪術師は風呂で清めた後

の花嫁に一定の数の結び目がある帯を締めた。ベラルーシでは妊娠した嫁に義母が自分の帯を結んでやった。セルビアの女性は妊娠期間中、邪視から守るために夫の帯を結んでいなければならなかった。

帯を結ぶことのバリエーションとして、守るべき人や空間に糸をめぐらす場合がある。セルビア人は赤い糸を産婦と新生児の周りにめぐらして、彼らを邪視から守った。(Левкиевская [2002] : 132-134)。

「遮断 преглада」

邪視を遮断するには、「×印をつける」方法がある。この×印は教会の儀礼と密接なつながりを持っている。つまり教会のシンボルである十字架を意味しており、家に悪霊を侵入させないことが目的である。もし家に一歳に満たない子どもがいたら、母親は太陽が沈んだ後、ナイフで全ての窓、ドア、ストーブの煙突などすべての隙間に×印をつけ、どんな悪いものも赤ん坊に作用しないようにした。

ウクライナやセルビアでは赤ん坊を邪視から守るために開いた手のひらの親指と小指で顔を十字方向に測定した。カルパチア山脈のガリチヤでは、産婆は、邪視に遭わないように新生児をへその緒で三回十字を切って祝福した。(Левкиевская [2002] : 49)。

「覆う укывание」

隠して、見えなくすることにより、危険なものの手が及ばないようにする方法である。一般的に何かで覆われたもの、つまり見るができないものには悪いまなごしは作用しないと信じられている。民俗文化において魔術的な覆いに使用される品物には、亜麻布、手ぬぐいや前掛けなどの布製品や、さらに深皿や壺などの食器もある。

東スラブでは、妊娠中の女性はお腹の中の子どもが邪視を受けないように前掛けを身に付けていた。スラブ全土の習慣として、妊婦のいる部屋の角は、妊婦と子どもを邪視から隠すためにスカーフや布で覆わなければならなかった。セルビア人は新生児を連れて外に出るときには前掛けで子どもを

覆った。(Левкиеаская [2002] : 56-57)。

「無害化 нейтрализация」

この防御のモデルは、危険な性質を発揮できないような特性を相手に与えることで、無害の状態を作り出すことを目的としている。言い換えれば、危険を発するものがじっとして動かず、口がきけなく、目が見えず、従順で、無力であるようにすることである。このことから、死者の持物を用いて邪視を無害化しようとした。例えばベラルーシのコチシでは死者の棺に入れるために縫った枕の残り糸を邪視よけとして、牛のしっぽに結んだ。ベラルーシのセリツァでは、死者の生前の持ち物を邪視よけに赤ん坊のゆりかごの中に置いた。冷たく、動かない、生きた自然の対局にあるものとして石を（まれに鉄を）用いることもあった。蜂を邪視から守るために、養蜂家は石を舌の下に入れて養蜂場を歩き回った。(Левкиеаская [2002] : 62-63)。

「攻撃 нанесение удар」・「撲滅 уничтожение」

危険なものに対して「予防の」あるいは「警告の」攻撃を与え、損害を与える魔よけである。邪視を及ぼす可能性のある潜在的な敵の視覚を、何らかの方法で損傷し、力を失わせるのである。「攻撃」と「撲滅」は同様の意味基盤を持っている。これには、刺したり切ったりする道具やチクチクする毒のある植物などが使われた。例えば、糸を紡ぐ紡錘や針などの「刺すもの」、「穴をあけるもの」を用いて敵の眼を見えなくする。安全ピンも使われた。赤ん坊のゆりかごに刺したり、鴨居に刺したり、洋服につけたりした。ナイフとハサミはスラブのどこの地域でも、過渡期にあたる人々を守ってきた。妊婦は邪視よけにポケットに折り畳みナイフを忍ばせた。その他にも先のとがった物やチクチクする植物がナイフと同様に産婦のそばに置かれ、悪霊から守った。ドア枠の柱に刺したり枕の下に入れたりベッドの下に置いたりなどした。

こうした攻撃戦略のバリエーションのひとつに、悪意あるものに呪文で鍵をかける「閉鎖 замыкание」がある。危険な相手の眼と口を「ふさぐ

завязывать」「縫う зашивать」もある。邪視から身を守るための方法として危険な相手の眼に砂をふりかける方法があるが、ポーリーシャでは、一つまみの塩を投げる方法が広まっている。

悪意ある人の眼を損傷するためには、水をかけたり、塗りこめたり、突き刺したりする。セルビア人の邪視よけの呪文には切り込みを入れたり斧で傷をつけたりするモチーフがある。「攻撃」「撲滅」の戦略は、悪霊、特に邪視の作用への極めて根本的で過激な予防方法である。(Левкиенаская[2002]: 73-78)。

「撃退 отгон」

この戦略は、非常に幅広い。

“アダーストーン”(ロシア語では鶏の神様 **куриный бог**) はロシアでは伝統的に追い払う意味を持つ。これは自然の作用により真ん中に穴が開いている石で、鶏だけでなく家畜や産業全体を悪い霊から守ってくれるとされる。鶏を守る場合には良く見える場所に石をおき、邪悪な視線がまず石に落ち、鶏に悪さをしないようにした。(Левкиенаская [2002]: 115)。

“鏡”はかなり遅くに民衆の生活用品となったが、すぐに完全に伝統文化に適応した。鏡はものを映し出し、そのことによりものを二つに見せるという特質のおかげで、危険の代理(代理 **замещение**)となることのできる魔よけとなった。鏡は魔よけとして家のドアの上にかけてられ、ゆりかごに下げられ、セルビアでは娘たちが持ち歩いた。(Левкиенаская [2002]: 117)。

“汚物による回避”ということも特徴的な魔よけである。邪悪なものも汚いものは嫌って近づかないだろうと、不潔さを利用するのである。これに用いられたのは、つば、糞、尿、ゴミ、汚水などがあり、スラブ全土で防護の魔法として用いられた。ウクライナでは邪視よけのために娘たちは時々汚水で身体を洗うよう命じられた。この例は二重の意味を持つ。つまり邪視を寄せ付けられない意味を持つとともに、自身に魔よけの特質を与えるという「魔よけ化」の意味を持つのである。ポーリーシャでは、母親は自分の尿で赤ん坊を洗い邪視を受けないようにした。(Левкиенаская [2002]: 120-121)。

“そらすこと”も有効な手段である。守るべき物から危険の担い手の「目をそらす」ことは、邪視予防として非常に頻繁に行われる。目立ち、珍しい物に注意を引き付けて対象を守ろうとするのである。守るべき人の隣に石、鉄、ハンマー、その他の固い物を置いて、邪視がそれらの方に「ぶつかる」ようにした。ポーシャでは、畝に突き刺した「古いほうき」や畑に立てた「かかし」は鳥を追い払うためだけでなく、種子への邪気のある視線をそらすためのものであった。養蜂者は動物の頭の骨を養蜂箱の前に吊るし、養蜂箱だと思わせないようにして邪視をそらした。スイカやブドウの畑にも同じ目的で吊るされた。セルビア人は牛のしっぽに昔の革の靴（ラプティ）を結び付け、邪視がそれに驚いて牛の乳房に気づかないようにした。南スラブでは羊の体の側面の毛を三角形に刈り残し邪視よけとした。マケドニアのプリレプでは多くの農家の屋根に突き出た小さな角が見られ、それらは避雷針としての機能を持つが、それ以外にも邪視を撃退すると言われている。「邪視」を持つ人は自分の視線に気を付け、よその家に入る時には赤ん坊などを邪視の被害に遭わせないように、まず最初に天井を見上げなければならなかった。赤ん坊の帽子には明るい色の小さなお花が付けられた。邪視の注意が最初にお花に落ちるようにするためである。（Левкиенаская [2002] : 132-133）。

“鉄”を使った製品は固いものの代表である。セルビア人は家に入る敷居のそばに蹄鉄を置いた。また鉄で邪視よけのお守りを作った。鉄は過渡期にある妊婦、産婦、新生児、結婚式での新郎新婦のための魔よけとなった。妊婦は鉄のかけらを懐に入れた。産婦はベッドの下に敷き入れ、新生児のゆりかごやあるいは洗礼盤に入れた。女性は出産後6週間以内に家を出る際には鉄を身に付けていなければならなかった。（Левкиенаская [2002] : 133）。

“石”はその固さと、叩かれても持ちこたえることから、魔をそらすと言われた。養蜂箱の間に置き、悪い視線があたらないようにした。家の前に置いて、病が石にとどまり、家に入り込まないようにした。悪い夢を見たときには、それが正夢とならぬよう石に内容を話さなければならぬとされた。死者をお参りしたとき、あるいは葬儀に出会ったときには、死が乗り移らないように石を触るきまりになっていた。（Левкиенаская [2002] : 134）。

“水銀”もその可動性ととらえがたさで 危険をそらし防止する能力を持った。ベラルーシでは水銀をラシャのはぎれに縫いくるみ、邪視よけとして身に付ける習慣がある。(Левкиевская [2002] : 134-135)。

“赤い色”の糸やリボン、布は全てのスラブ人にとって邪視に対する強力な対抗手段である。牛の角や尾、赤ん坊や妊婦の手に結んだり、洋服につけて悪い視線をそちらに引き付けた。妊婦の部屋のドアの上に赤い布を吊るし、入る人の目が最初に赤い布に行くようにした。花嫁は針に赤い糸を通して服に刺し、邪視よけとした。

“変わった色”の組み合わせを使い、悪い視線をそこに引き付けることも行われた。シベリアでは、子供に左右それぞれ違う色の靴下をはかせたり、黒い衣服に白い糸でつぎをあてたりした。花嫁の顔や額に染料で黒い点を付け、目を引くようにした。(Левкиевская [2002] : 135)。

“つばを吐くこと”は、危険の主にむかって、あるいはその人が去った方向に向かって行われると撃退する意味となる。ウクライナ西部では、小さな子供がいる家を訪れた人は、その子を自分の邪視の被害にあわせないように、子どもを見る前に自分のポケットに唾を吐いた。広く知られている、子供をほめられた時や何か良いことを予言された時に、左の肩越しに「チフ チフ チフ」とつばをはく音の模倣をして邪視を追い払うのは多くの場面で撃退の公式となっている。(Левкиевская [2002] : 120-121)。

“ひっくり返すこと”で邪視を追い払う方法がある。ロシア北部では、結婚式に行く若者に服を着せるとき、ひっくり返したフライパンの上に立たせた。過渡期にある小さい子どもや新婚夫婦は最も頻繁に、防御の目的で衣服を裏返しに着た。また普通の人々にとってもこの方法は邪視をそらす方法として用いられた。ポーリーシャでは、邪視よけに自分の身に付ける衣服のいずれかを裏返しに着た。また裏返しにしたシャツで身体を洗い、拭いた。(Левкиевская [2002] : 126-127)。

“ジェスチャー”の中にも脅して追い払うものがある。邪視の眼を持つ人に対しては、「кукиш クキシ」という手のポーズ（握りこぶしをつくり親指を人差し指と中指との間にいれた形）を見せる。その人の去った後に

は、石炭、塩、焼けたレンガのかけらなどを投げる。ポーリーシャでは大昔にお守りとして使われた木で形づくった「クキシ」が発見されたという。(Левкиаская [2002] : 146)。

上記のように、邪視からの魔よけの戦略について、まじない物や行動による10種類のタイプを確認してきた。魔を寄せ付けないための守りの手段と、魔を追い出すための攻撃の手段があり、多様な戦略が具体化されている。家の中の調度、あるいは外の畑や屋根、あるいはベッドやゆりかご、衣服など日常のあちこちに息づいている。魔から大切な人や物を守るため、民衆の知恵と技術がありとあらゆる場所に予防と対抗手段となっはりめぐらされているのである。民衆の間ではお互いがその決まり、タブーを守り実行していることで生活が円滑に進んでいくのであろう。

スラブ・ロシアの伝統的な邪視の概念をまとめると次のようになるだろう。

1. 邪視 **сглаз** の原因は、視線、ほめことば、意地悪な妬みの感情、良いことの予言である。
2. 邪視の加害者となる人は、偶発で気に特別な目の力を持った人、身体に傾きを持つ人、独特な眼の色の人、特別な知識を持つ呪術師、魔法使い、特別な日に生まれた人など。また邪視の被害者となる人は、特に移行段階にある人(出産、結婚、死)、生命に関わる価値のあるもの(健康、子ども、仕事、産業)などである。加害者も被害者も「境界」が特徴の一つとなっている。
3. 邪視の被害は、突然の発病、死亡、家庭不和、仕事の不首尾、家畜の疫病死など。
4. 魔よけには、まじないのことば、物、行動、の3つがある。常に潜在的な危険に対して働く。魔よけの戦略には、包囲、遮断、境界、覆う、無害化、攻撃、撲滅、撃退、代理、魔よけ化の10種類がある。

次に現代のロシア社会における邪視のとらえ方に目を向けてみよう。

3. 現代における邪視

3-1. 世論の傾向

まず、2020年にレヴァダセンター²により行われた社会学的調査を見てみよう。その中で「邪視 **сглаз** や呪い **порча** を信じますか？」という問いがなされており、この問いに対する回答結果は、2010年から2020年までの10年間の5回分の調査に対するものが示されている。(18歳以上の1600人を対象)

【表1】

Верите ли вы или нет в сглаз, порчу?
сглаз (邪視)、порча (呪い) を信じますか、信じませんか

単位：%

年	2010	2012	2015	2017	2020
月	VIII	VIII	VII	X	IX
Верю, что существует 存在すると思う	29	21	15	24	28
Скорее всего существует 存在する可能性が高い	32	38	40	31	21
Скорее всего не существует 存在しない可能性が高い	9	18	18	15	13
Верю, что не существует 存在しないと思う	15	10	15	15	32
Затруднились ответить 答えるのが難しい	16	13	12	16	5

N=1600

Общественное мнение-2020[2020]：113の表を参考に作成

2 ロシア最大の独立した調査センターで非政府組織。世論調査および社会学的研究を行っている。創設者であるロシアの社会学者ユーリ・レヴァダにちなんで名付けられた。1987年に設立され、2003年までは「全ロシア世論研究センター（ВЦИОМ）。

その結果をみると、2020年では、「邪視は存在すると思う」が28%、「存在する可能性が非常に高い」が21%で、両者を合わせると49%となり、約半分の人がその存在を肯定している。2010年、2012年、2015年、2017年、2020年の5回を通してみると、この数値は、61%、59%、55%、55%、49%という結果になっており、常に一定数の人々がその存在を信じており、安定して人々の心に浸透しているといえるだろう。2020年になって「存在する可能性が高い」から「存在しないと思う」に一部傾向が移っているが、これは新型コロナウイルスの影響により、人と会うことや人と話す機会が減ったこと、または差し迫った感染の恐れが神秘的な力への恐れに勝ったのかもしれない。

邪視に対する信仰は21世紀になっても少しも衰えてはいない。おそらく社会の科学技術の進歩とは関係のないものであろう。(Левада-центр [2002] : 113)。

3-2. 子どもと邪視

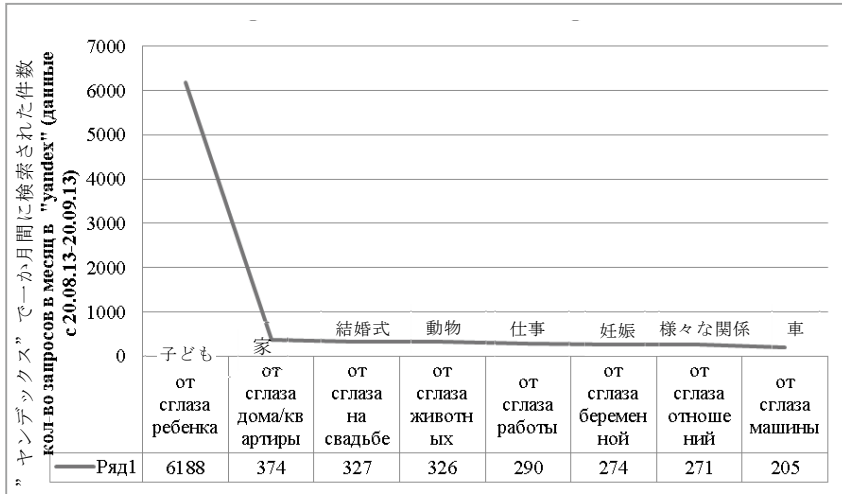
3-2-1. 誰が最も邪視の被害に遭いやすいのか

ペトロフは、インターネットを利用した分析を行った。検索サイト Yandex に一か月の間にロシア語で入力されたキーワードを使って調査した。【図1】は、「最も邪視の被害にあうことを恐れるのは何か」という質問に対する回答である。結果は、「子どもへの邪視」が群を抜いて多かった。(Петров [2014] : 345)。これは、ロシアの現代社会の人々が子どもへの邪視を最も危惧しており、同時に子どもが最も大切な存在であることを示しているのではないだろうか。

その他の項目を見ると、伝統的に邪視の対象となるとみなされていたリミナリティ（境界状態）の項目（結婚・出産）に関しては件数が少なく、死に関する項目はすでに圏外である。出産に関しては、現代でも命がけのものであることには変わりなく生命の神秘は不思議なものであり続けているものの、医学が発達し、多くの人が病院で生む世の中になってきている。昔の口

シアの農村のように、出産は産婆の力を借りて様々な呪術的儀礼と助産行為に守られて行われ、周囲には知られずに行うことが妊婦の苦しみを減らすと考えられた（Кабакова [2001] : 64-65）時代とはとらえ方が異なっており、魔の入り込む隙間が少なくなっているのかもしれない。

「仕事」という項目もあるが、その中身は現実の変化により変化する。伝統的な農民の仕事であった種まきや収穫、養蜂や狩猟、漁業に代わり、失うことを恐れる自分の仕事というものにとって代わられる（Петров [2014] : 345）。



Петров [2014] の表を一部修正

【図1】 カテゴリー別の邪視の恐怖
Страх глаза по категориям

サンクトペテルブルグ大学のフォークロア古文書館には北部ロシアで採集した100件以上の邪視に関するインタビューが保存されている。これによると、ロシアの農村で最も邪視の被害が多かったのは「子ども」であることがわかっている。（Веселова, Мариничева [2012] : 53）

ロギノフは南カレリア地方における現代の邪視現象について調べ、「民衆における子ども、特に乳幼児の邪視による病気についての認識はすべてのスラブの民衆の中に見られ、その治療方法は異なっているが類型学的には似ている。(Логинов [1995])」と述べており、このことから子どもにおける邪視現象はスラブ全体に共通に存在するものだと考えられるだろう。

このように邪視の現象において子どもが占める位置はとて大きく、現代の民衆の心においても恐れと心配の大きな要因となっていることがうかがえる。サンクトペテルブルク大学やロギノフの調査の例も取り上げながら、北部ロシアを中心に子どもへの邪視現象の特徴について確認していこう。

1歳未満の乳児は、邪視の被害に遭いやすいとみなされている。まずこの現象は家を訪れた「他人」により与えられることが多いと言われる。邪視は意識的な目論見ではない。偶然に攻撃者となってしまった人は、ただ「やってきた」「寄った」、時には「そばを通りすぎた」だけの場合もある。(Веселова, Мариничева [2012] : 55)

こうした子どもに関する例を挙げてみよう。

うちのリュバシュカが小さかった時。最初の子よ。マリヤ・イワノヴナが来て、(うちでお風呂に入ったの) …ここに来た。「まあ！」と。どうしてだか。それだけ。そして彼女は家に帰った。でもうちの子はその夜大声で泣いた。いつも大人しい子が一何も聞かない、見もしない！寝かしたらすぐに眠る子なのに。そのときは一晩中大声で泣いていたわ。(Веселова, Мариничева [2012] : 55)

私は邪視など全く見たこともなかった。小さなアリヨンカがまだ生まれていなかったときには…。その時は、アーニカがやってきて、アリヨンカと遊んだ。その後アリヨンカは、一晩中床を這いまわった。

(Веселова, Мариничева [2012] : 55)

これらの例では、邪視の加害者となる人は「普通の人」であることが示されている。たまたまそばを通ったか、立ち寄っただけの人である。伝統的な概念では、「特別な状況にある人」や「特別な眼の色の人」などが挙げられていたが、そればかりでなく「普通の人」が加害者となる可能性がある。

ロギノフの調査によると、ここ数十年でヴォドロゼロ湖地域では邪視の被害の例が増えているが、これは「現代の母親が『生後9か月までの子どもを誰にでも見せている』からである（**Логинов** [1995]）」と説明している。

こうした邪視を防ぐ簡単な方法は、一般的には見知らぬ人との接触をさけることである。特に、以前その人により邪視被害にあったことがある場合は家に通さない。もし家に入れた場合は、子どもをよその部屋に連れて行くか、ゆりかごかベビーカーに寝かせて、母親のスカートで覆う。急に知らない人がやってきたら、子どもが見えないように抱っこをする。（**Логинов** [1995]）

生後40日間（または洗礼を受けるまで）は医師と親戚以外には誰にも赤ん坊を見せてはいけないという古い伝統は、今でもロシアに根強く残っている。「迷信は迷信。でも念のため。」というわけである。邪視の予防策のひとつとして、子どもの写っている写真も一定期間人に見せてはいけないと言われている。SNSを多くの人が利用している中、若い親たちはInstagramに写真を載せる場合、子どもの顔を見せないように、スマイリーの顔スタンプで隠したり、子どもの後ろ姿を撮影している。（これは子どもへの犯罪の危険とはまた別の意味合いで行われているのである。）（**«Чтоб не сглазили» : Зачем родители скрывают лица детей в соцсетях** [2018]）

また、間投詞**Ой!**（まあ！あら！などの意味）をつけることは危険だとヴェセロワ・マリニチェワは指摘する。間投詞「**Ой!**」（驚きの表現）は不意のほめことばの標識となる。それは「攻撃者」の話法を組み立てる。会話の中では邪視に関わるそんなことばを簡単に識別することができる。

（**Веселова, Мариничева** [2012] : 61）

そのような会話を例示しよう。

誰かが声に出して言ったりするでしょう。いいですか。「まあ！なんて可愛い赤ちゃんのかしら。とても。」うっとりしていつまでも言う。「あそこはパパに似てるのかしら、ママにも似てるわね、坊や」そしてどこかへ去って行く。あっちやこっちへ。そしてほら、赤ん坊は次の日から二日間、夜通し泣き続けて誰も落ち着かせることはできない。おっぱいもおしゃぶりもどれもだめ。そう、どうして大声で泣くのか自分でわかるでしょう。(Веселова, Мариничева [2012] : 60)

そう、邪視はほら、見るの。赤ん坊を見るためにやって来る。誰かがアッと言ったりおおと言ったりする。「まあ、なんて、あそこはそっくりね。」と言う。その訪問の後、赤ん坊は具合が悪くなり、神経が高ぶったみたいに不安げになる。これが赤ん坊が邪視にあったということ。(Веселова, Мариничева [2012] : 61)

間投詞 **Ой!** で始めるほめことばについては、ウラルでも同様に危険だとキリヤノワは言う。上述のロシア北部の例と全く同様に、ウラルの村でも邪視をおこすという理由で、特に赤ん坊に対して **Ой!** と言ってはいけないと信じられている。「人は深く隠されていても話の意味を敏感に感じ取る。潜在意識が二重のメッセージを受け取ったとき、邪視が始まる。言葉は同じでもイントネーションが反対の意味を伝えることもある。不必要な「叫び声」により、意図せずに、あるいは故意に危害を加えてしまう。この間投詞には過度の熱意がこめられており、従って不誠実である。これにより通常の発話の流れが変わり不必要なアクセントとエネルギーの高まりが起こるからだ。(Кирьянова [2020])」またルシノワも「現代社会には（伝統的社会だけでなく）コミュニケーションの決まりがあり、これを破ると、邪視につながる可能性がある。その決まりの一つが、小さい子どもや若い家畜をほめることである。その際、最も厳しい禁止事項はほめことばに伴う間投詞 **Ой!** の

使用である。」と述べている。(Русинова [2019])

加えて邪視は、他人からだけではなく「自分」で自分をほめること、つまり自慢が邪視となって自分に害を及ぼすこともあると広く言われている。サンクトペテルブルク大学の文学部の学生たちも両親が邪視に遭わないよう自分の成功を自慢することは許されなかったと語っている。(Веселова, Мариничева [2012] : 51) さらにヴェセロワ・マリニチェワの調査では、母親や父親、親戚さえも自分の子どもに対して邪視の加害者となる場合があるという。(Веселова, Мариничева [2012] : 58-59) その予防策としては、子どもに近づくときにマッチのような小さな木切れを口に入れるとか、呪文を言う、こぶしの先でテーブルをコツコツ叩くという方法を紹介している。(Веселова, Мариничева [2012] : 61-69)

上記のように、邪視を引き起こす加害者には「誰でも」がなりうるのである。

3-3. 子どもの邪視の治療

子どもが邪視のために具合がわるくなった場合、日常的にまじない治療師のところに通う習慣はなく、子どもが嫌な人と接触したり、邪視による病の兆候が見つかった場合には、自分たちでそれが本当に邪視によるものなのか、誰からもたらされたものかを判断し家で治療を行う。通常、家庭で邪視を取り除くことは有効だと考えられている。しかし時には邪視の魔法的力が強い場合もある。その場合は地元のまじない治療師のところへ向かい、さらにその後、希少な魔法使いや呪術師を頼ることになる。(Логинов [1995])

以下に幼いころに邪視の治療を受けた若者の例を挙げてみよう。

その時おばあちゃんは孫の頭の上でマッチに火をつけるか蠟を流した。これが幼い時に行われた手順だった…。邪視をとりのぞくのはボルシチに少し塩をきかせるのと同じような日常の動作だった。

「普通のおばあちゃんなら誰でも子供の邪視の取り除き方を知っていた。これはハリーポッターのようなものとは違って、現実のことなん

だ。]

(Ославская [2021])

子どもの邪視は市場や教会その他の群衆の中で起こった。お祝いの服を着てそこでたくさんものを見て、そして邪視に遭った。ポルタバ州で育ったアレクサンドラはこれを「人々から」と呼んでいた。もしこれが起こったらママとおばあちゃんは「水を注いだ」。

「ドアの取手にボウルの水を上から注いだら、下でこの水を受け取り、子どもはそれで顔を洗うの。それからスカートかエプロンの裏側で拭くのよ。」

(Ославская [2021])

「誰かに邪視を受けたかもしれないと疑ったとき（たとえば教会である女性が悪意ある眼で見て、頭痛が始まったとき）ママかおばあちゃんは瓶とマッチ箱を持ってきた。小さい子供たちには0.5ℓの瓶、年長の子供たちには1ℓの瓶を与えた。この瓶に水を入れ、順番にマッチ棒に火をつけて、それを水に投げこんだ。私は瓶の四方から水を少し飲んで吐き出さなければならなかった。その後、何本のマッチが水に浮かび、何本が沈んだかを数えた。」

結果の解釈は、この方法を私に話してくれた人すべての人と同じだ。マッチが頭を下にして沈んだ場合、それは邪視を意味した。沈んだマッチが多いほど威力は強い。この儀式は専門家を必要とせず、誰でもやることができ、都市の中にも根付いている。 (Ославская [2021])

重い症状の場合は、専門のまじない治療師のところに行くことになった。

「私が幼い時、おばあちゃんは私を教会へ連れて行くのが好きだった。私は可愛かったし聖歌隊で上手に歌った。そのあとよく気分が悪くなった。」ハリコフで生まれたオクサーナは（…）おばあちゃんと地元の教会に通った。祝日や日曜日は、教会には人が一杯で、礼拝が終わるころには、その密集した場所に新鮮な空気などなかった。オクサーナは礼拝

が終わるとよく失神したり頭が痛くなったりした。おばあちゃんにはわかっていて。隣の人がオクサーナがどんなに可愛い子か、繰り返し言ったからだ。帰り道に邪視を取り除く専門の人のところに連れて行かれた。「汚れた洋服、できればパンツで顔を拭かれた。何かつぶやいて唾をはいた。自分の後ろが見えるように身体を曲げて、あっちこっちにつばをはくように言われたわ。」 (Ославская [2021])

これらの例から、通常、邪視は家庭で治されており、それが日常行われていたことがわかる。その方法には定型のパターンがあり広く利用されていた。また現代の都会の若者は、幼いころに邪視を取り除いてもらったという体験をよく覚えている。特別な知識を持つまじない治療師の存在も普通のことであった。これは現代で、特に若者に邪視信仰が保たれている理由のひとつであろう。彼らは幼いころに理由なく具合が悪くなった際、祖母や両親の主導で邪視を取り除いてもらったことを覚えている。また、まじない治療師のもとでの呪術的な体験もある。その結果、病気が回復したという事実が治療が正しかったという信頼につながり、こうした一連の記憶が邪視を信じる気持ちの根底にあるのではないだろうか。

現代のロシア社会における邪視の特徴としては次のことが挙げられるだろう。

1. 邪視信仰は、人類の長い歴史を通じて存在してきたが、科学技術の発展した現代のロシア社会においても田舎と都会を問わず存在していると考えられる。3割以上が邪視の存在を信じており「存在する可能性が高い」をあわせると約5割が信じている。
2. 最も恐れているのは子どもへの邪視である。
3. 邪視の加害者には「誰でも」なりうる。
4. 子どもを邪視から守るため、一定期間赤ん坊を「人に見せない」予防策は今も若い両親に根強く信奉されている。
5. 現代社会に生きる若者も幼い時の記憶により邪視についての知識が

ある。これは邪視信仰が受け継がれている一つの原因と考えられる。

4. まとめ

病気や死、物事の不首尾を引き起こす「邪視」の俗信は、ロシアにおいて今も広く信じられていることが確認された。この俗信の起源は古く、又多くの他の民族の間でも認められる現象である。この邪視の概念には「視線」の力によるものと、「ことば」の持つ力によるものの二つの種類がある。特に無意識な「羨みの気持ち」がひそむ視線やほめことばには魔術的な力があると考えられた。この俗信はロシアにおいて現代に至るまで受け継がれ、人々の生活の中に浸透している。特に子どもに対する邪視が最も恐れられており、ほぼ全ての母親が、生後間もない赤ん坊を近親者以外に見せないよう心を配っている。

邪視の起こるメカニズムについてははっきりとはわかっていない。しかし古代から存在する「目の力」、「視線の持つ魔術的な力」への信仰や恐れと結びついているのではないだろうか。視線の力は単なる伝説ではない。人は観察されるときや審査されるときにはある種の緊張を感じる。精神科医のゴルサコフは、最大の苦痛の一つは一人になる時間を持っていないことではなく、永遠に誰かの視線の元にいることだと述べた（Долгорукова [2011] : 207）。私達は日常的に「穴が開くほど見つめた」や「視線を痛いほど感じた」などの表現をする。誰かに見られているような気がして後ろを振り返ると友達がこちらを見ていた、ということもあるだろう。新ロシア語詳解辞典では、視線は「人が何かを見るとき、目から発せられる何か目に見えないもの」と説明している（Новый объяснительный словарь синонимов русского языка [1392] : 85）。視線に宿る何らかの力に対するこうした感覚は邪視に通じるであろう。無意識の視線の力への信仰が、科学に通じた現代人の邪視信仰の根底にあることが考えられる。

また邪視は「意図しない」働きであるという特性があり、誰もが自身の意思に関係なく邪視の害を及ぼす可能性があると考えられる。そのため、予測でき

ない厄災に対抗するために人々は心を砕き、魔よけをほどこしている。

魔よけは、邪悪なものの侵入を防ぎ、また退散させるためのものである。邪視に対しても多様な魔よけの存在を確認することができた。魔よけは常に潜在的な危険に関わるものであり、危険な出来事に先行する。レフキエフスカヤの定義により、魔よけの作用を「危険から対象を守る」と「危険を除く」という二つのベクトルに分け、10のモデルの特徴を概観した。スラブ全体に共通する、邪視に対抗する魔よけの戦略の一端が確認できた。大切な人や物を邪視から守るために、家や生活道具など暮らしのありとあらゆる場所に邪視よけがはりめぐらされており、それは人々の心の不安をやわらげる役割も果たしている。「すべてがうまくいきますように」と願う気持ちは様々な魔よけの実践となって可視化され、現代においても日々の生活の手段として生き続けている。

参考文献

- Алчинова Г. Р. [2019] «О башкирских суевериях антропологической направленности (на примере сглаза)», *Litera.*, С.147-153.
<https://cyberleninka.ru/article/n/o-bashkirskih-sueveriyah-antropologicheskoy-napravlennosti-na-primere-sglaza> (2021.11.30 確認)
- Андреева Е. В., Верховцева М. А., Петрова Т. Ю. [2019] «Обереги в символической и повседневной практике народа саха», *Человек и культура*. №5., С.27-33.
<https://cyberleninka.ru/article/n/oberegi-v-simvolicheskoy-i-povsednevnoy-praktike-naroda-saha> (2021.11.30 確認)
- Арнаутова Ю. Е. [2004] *Колдуньи и святые : Антропология болезни в средние века.*, СПб., Алетейя., (Серия «Библиотека средних веков»)
- Арпесьяна Ю. Д. [2004] *Новый объяснительный словарь синонимов русского языка.*, М., Вена: Язык славянской культуры., С.613-614
- Волкова Я. А. [2014] «Невербальная концептуализация зависти в руссеолингвокультуре», *Вестник ТГПУ*. №2., С.21-26.
https://vestnik.tspu.edu.ru/archive.html?year=2014&issue=2&article_id=4387 (2021.11.30 確認)
- Диянова А. М. [2010] «Обереги традиционной родильной обрядности сибирских

- татар», *Омский научный вестник*, С.246-249.
<https://cyberleninka.ru/article/n/oberegi-v-traditsionnoy-rodilnoy-obryadnosti-sibirskih-tatar> (2021.11.30 確認)
- Донцов А. И. [2014] *Феноменон зависти. Homo invidens?*, М., Эксмо., С.34-106.,
<https://istina.msu.ru/download/153461311/1gLOeR:Te3PUV-02thHxTCcBTVK5tzh850/> (2021.11.30 確認)
- Долгорокова М. Ю. [2011] «Социально-психологический анализ феномена "Сглаза"», *Российский научный журнал*, С.206-211. <http://rnjournal.narod.ru/20.pdf> (2021.11.30 確認)
- Грушко А. Е., Медведев Ю. М. [1996] *Словарь руссуких суеверий, заклинаний, примет и поверий*, Нижний Новгород., Русский купец и Братья славяне.
- Забылин М., [2002] *Русский народ : Его обычай, предания, обряды и суеверия*, М., Эксмо.
- Зеленин Д. К., Пер. с нем. К.Д. Цивинной., [1991] М., *Восточнославянская этнография*, М., Наука.
- Кабакова Г. И. [2001] *Антропология женского тела в славянской традиции*, М., Ладомир.
- Крейдлин Г. Е. [2002] «Жесты глаз и визуальное коммуникативное поведение» *Труды по культурной антропологии*, М., С.236-251., <http://istorja.ru/forums/topic/798-gekreydlin-zhestyi-glaz-i-vizualnoe-kommunikativnoe-povedenie/>
- Инна Веселова., Юлия Мариничева. [2012] «Жаба тебе в рот», «фи́га в кармане» и другие способы ответить на похвалу», *Комплекс Чебурашки, или Общество послушания: сборник статей*, СПб., Пропповский Центр, С.51-73. (Серия «Первичные знаки, или прагмемы»).
http://www.pragmema.ru/ru/assets/pdf/kompl_cheb_zhaba_tebe_v_rot.pdf
(2021.11.30 確認)
- Иохвидов В. В. [2016] «Артефакты личной безопасности в субъектном пространстве студентов вуза», *Российский психологический журнал*, т.13, №.4,
<https://cyberleninka.ru/article/n/artefakty-lichnoy-bezopasnosti-v-subektnom-prostranstve-studentov-vuza> (2021.11.30 確認)
- Котова. И. Б., Краснянская Т. М., Тылец В. Г., Веселова В. Г., Иохвидов В. В., [2016] «Артефакты личной безопасности в субъектном пространстве студентов вуза», *Российский психологический журнал*, Т.13, №.4., С. 51-67
<https://cyberleninka.ru/article/n/artefakty-lichnoy-bezopasnosti-v-subektnom-prostranstve-studentov-vuza> (2021.11.30 確認)

- Левкиевская Е. Е., [2002] *Славянский оберег. Семантика и структура*. М., Индрик.
- Левкиевская Е. Е. [2009] «Сглаз», *Славянские древности: Этнолингвистический словарь в 5 тт.*, М., Международные отношения. С.597-602
- Логинов К. К. [1995] «Феноменон детской «порчи» в современной лечебной магии русских южной Карелии», *Электронная библиотека публикации о музее-заповеднике "Кижиги"*
<https://kizhi.karelia.ru/library/> (2021.11.30 確認)
- Михайлова А. А. [2016] «Феноменон сглаза и обережные мотивы в сербской традиционной вышивке : поиск актуального подхода к изучению этномузеологического наследия», *Studia Slavica et Balcanica Petropolitana*, С.47-64.,
<https://cyberleninka.ru/article/n/fenomen-sglaza-i-oberezhnye-motivy-v-serbskoy-traditsionnoy-vyshivke-poisk-aktualnogo-podhoda-k-izuchenyu-etnomuzeologicheskogo> (2021.11.30 確認)
- «Общественное мнение-2020 : ежегодник» [2020], М., Аналитический центр юрия леввады («левада-центр») <https://www.levada.ru/sbornik-obshhestvennoe-mnenie/> (2021.11.30 確認)
- Ославская С. [2021] «Твои глаза в моей сраке» : как мы верим в сглаз и почему это не стыдно» <https://zaborona.com/ru/tvoi-glaza-v-moej-srake-kak-my-verim-v-sglaz-i-pochemu-eto-ne-stydno/?nowprocket=1> (2021.11.30 確認)
- Петров И. Г. [2009] «Магические и защитные функции одежды в чувашских родильных обрядах», *Известия Самарского научного центра Российской академии наук*, Т.11, № 6., С.300-304.
<https://cyberleninka.ru/article/n/magicheskie-i-zaschitnye-funktsii-odezhdy-v-chuvashskih-rodilnyh-obryadah> (2021.11.30 確認)
- Петров Н. В. [2014] «Дурной глаз : традиция, современность, интернет», *Сила взгляда: глаза в мифологии и иконографии*, Отв. ред. и сост. Д.И. Антонов. М., РГГУ, С. 317-355.
- Раденкович Л. [2015] «Дурной глаз в народных представлениях славян», *Живая старина*. М., №3., С.33-35
- Руженков В.А., Севостьянов О.В. [2013] «Медико-социальный аспект оккультных убеждений специалистов, участвующих в оказании психиатрической помощи», *Современные проблемы науки и образования*. № 3. <https://science-education.ru/ru/article/view?id=9356> (2021.11.30 確認).
- Сериков А. Е. [2016] «Практики избегания взгляда в русской культуре» *Вестник Самарской гуманитарной академии. Серия : Философия. Филология*.

- №.1 (19) С.44-62.
<https://cyberleninka.ru/article/n/praktiki-izbeganiya-vzglyada-v-russkoy-kulture> (2021.11.30 確認)
- Сурков Д. А. [2012] «Амулеты и обереги в контексте магических представлений аборигенных народов западной сиббири», *Вестник Томского государственного университета*, С.100-102.
<https://cyberleninka.ru/article/n/amulety-i-oberegi-v-kontekste-magicheskikh-predstavleniy-aborigennyh-narodov-zapadnoy-sibiri> (2021.11.30 確認)
- Флигинских Е. Е. [2014] «Обрядовые суеверия в культуре русского народа», *Вестник Марийского государственного университета*, С.109-112.
<https://cyberleninka.ru/article/n/obryadovye-sueveriya-v-kulture-russkogo-naroda> (2021.11.30 確認)
- Ушакова Д. Н. [1940] *Толковый словарь русского языка*, Т.4., М., С.114.
- Хаккарайнен М. В. [2005] Локальные представления о болезнях и лечении (поселок Марково, Чукотка). Афтореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата исторических наук, СПб.
- «Чтобы не сглазили : Зачем родители скрывают лица детей в соцсетях» [2018]
<https://www.wonderzine.com/wonderzine/life/life/235299-hide-yo-kids>
 (2021.11.30 確認)
- Шараева Т. И. [2009] «Обереги в детском цикле у калмыков», *Известия Алтайского государственного университета*, С.259-262,
<https://cyberleninka.ru/article/n/oberegi-v-detskom-tsikle-u-kalmykov>
 (2021.11.30 確認)
- Шведова Н. Ю. [2007] *Толковый словарь русского языка с включением сведений о происхождении слов.*, М., 2007., С.866
- Foster G.M. [1972] “The Anatomy of Envy : A study in Symbolic Behavior”,
Current Anthropology 13 (2), pp. 165-202 <https://escholarship.org/content/qt60h425cx/qt60h425cx.pdf> (2021.11.30 確認)
- 阿部年晴 [1997] 「日常生活の中の呪術 : 文化人類学における呪術研究の課題」『民族学研究』62(3)、日本民族学会
- 奥田若菜 [2008] 「嫉妬する目 : ブラジルにおける邪視と社会格差」年報人類化学 29-1, pp117-132、大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室
- 齋藤君子 [2008] 『悪魔には2本蠟燭を立てよ : ロシアの昔話 俗説 都市伝説』三弥井書店
- スライマーン・アラールエルディーン (Alaaeldin Soliman) [2018-2019] 「アラビア語の社会・文化的特質 : 挨拶と邪視を中心に Arabic Social and Cultural

Characteristics Focusing on «Every-day Greetings» and «Evil eye» 『アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究—中間報告書 (2018-2019)』 pp.33-42

田中宣一 [2017] 「邪視と雑神」成城文藝第 240 号 (成城学園創立 100 周年記念号) pp.161-174 成城大学文芸学部

堂光徹 [2019] 『魔除けの民俗学：家・道具・災害の俗信』角川選書

東浦義雄・船戸英夫・成田成寿 [1974] 『英語世界の俗信・迷信』大修館書店

P.G. ボガトウイリョーフ著 千野栄一・松田州二訳 [2000] 『呪術・儀礼・俗信：ロシア・カルパチア地方のフォークロア』岩波書店

藤沼貴 (編) [1991] 『ロシア民話の世界』早稲田大学出版会

南方熊楠 [1971] 「小児と魔除 (原題「出口君の小児と魔除を読む」『南方熊楠全集 2』、pp99-120, 平凡社